

中越地震災害調査結果報告会 ～川口町の地盤と震災～ 裏方報告

小松原 琢¹⁾・宮地 良典¹⁾・吉見 雅行²⁾・中澤 努¹⁾

1. 震災調査で感じたこと

2004年10月23日, この日新潟県中越地方は突然地震に襲われ, 隣県と合わせ地震後の関連死を含む死者は59名, 重軽傷者は4,805名にのぼるといふ大きな被害をこうむりました。中でも震央の位置する北魚沼郡川口町は, 震度7という兵庫県南部地震以来の強震動によって, 家屋倒壊, 地すべり・山崩れ, 地盤の液状化等々の災害が発生し, 6名の方が亡くなられるなどの大きな被害を受けました。

私達は, 震災3日後の10月26日から災害状況の調査を始めました。この人口6,000人弱の川口町で見たもの・出会った出来事は数々ありますが, 最初に感じたことは, ほんの数日前まで営まれていたはずの普通の生活はどこに行ってしまったのか? という落ち着きどころのない違和感でした。しかし, 町の人々は調査にやってきた私達を暖かく受け入れ, 大変な状況の中で様々な貴重な情報をくださいました。その後幾度か調査のために町を訪ねるうちに, この町の人のもつおらかさ, 暖かさをますます深く感じるようになりました。

ところで災害調査に限らずフィールドワークは, 必ず地元の人々から何らかの協力を受けながら行っています。そこでお世話になった方々に調査結果の報告をするのは自然な成り行き,.., と言いたいところですが, 現実には理想通りにできません。今回の調査は, 震災調査という人の生存そのものに密着したものであり, 町の各部署や住民の方々にお世話になることが多かったこと, そして町の雰囲気助けられて調査が進んだこと等々が相まって, 調査担当者の間で「地元の人々向け報告会を開こう。そこで一般の方からダイレクトに災害研究に対する要望や苦情を聞こう。」という案が湧きだしました。

2. 報告会に向けての準備

報告会開催を思い立ったのは震災から1年間の調査が終了した2005年12月のことです。「どうせやるなら, 川口町で調査してきた新潟大学・防災科学技術研究所と一緒に報告会を開こう。機関毎にバラバラに報告するよりも, 聞きがいのある報告ができるのでは?!」という考えから, 新潟大と防災科研の調査担当者にお話を打診しました。両機関の担当者から即快諾をいただき, 3者合同で降雪期後・農作業開始前の3月下旬ごろに報告会を開くことが決まりました。

それ以降, 私達4名は裏方として報告会の準備運営を担当することになり, 町の担当者(川口町企画商工課)との打ち合わせ, 内容の調整, 広報ビラとポスター, 資料の作成, 発表演習等々の準備を, 関係者の皆様の協力に支えられつつ充実した気持ちで進めさせていただきました。

打ち合わせで川口を訪ねる度に, 倒壊家屋の多かった東川口地区で新築の商店が営業を再開していく様子を垣間見させていただき, ほっとしました。その一方で, 突然家族をなくされた方にとっては, 「復興」を基調とする雰囲気の中で今さらの「震災予防」を意図する報告会に, 違和感を覚えられるのでは? という心配が頭をよぎるようになりました。実際, 「だいぶ復興が進みましたね」と企画商工課長さんに話したところ「いや, まだ表面だけですよ。今もたくさんの人が仮設で暮らしていますよ。」と言われて, 所詮自分是他所者なのだなあ, と感じたこともありました。

ともあれ, ①一般の人に分かりやすく・正直に調査結果を伝える。②対話を通じて, 地元の人々の意見を聞く, ③将来も視野に入れて直接本音で対話できる関係を作る, の3点を報告会の目標として準備を進めました。このため, 町の方からの要望で発表の内容を

1) 産総研 地質情報研究部門
2) 産総研 活断層研究センター


キーワード: 中越地震, 災害, 一般講演

変えたり、地すべり関係の発表を加えたり、といった企画の変更を行っています。また、地元の方とお話する雰囲気重視のため、地元新聞社以外の報道機関や研究機関には事前に連絡しませんでした。この点で閉鎖的と感じられる方がいらっしゃるかもしれません。しかし、多くの報道機関や研究機関関係者が入ることにより地元の方の話を聞く時間が減ってしまうことを恐れたものとご理解願います。最終的には、第1部前半は口頭報告(震災実態とその地学的

要因に関する口頭発表)、第1部後半はパネル展示(第1部では聞けなかった個別的・具体的な問題に対する質問と災害研究に対する意見を聞く時間)、第2部懇親会(今後の相互交流のきっかけとなることを意図して、一献傾けながら・・・)という3部構成とし(資料1)、ご来場いただいた方には土曜の午後たっぷり聞いてかつ話していただけるような場を作るよう、心がけました。

資料1 川口町内全戸に配付したチラシ。

中越地震災害調査結果報告会 **～川口町の地盤と震災～**



3月25日(土)午後1時～(1時30分開演)
於 川口町生涯学習センター

主催：産業技術総合研究所・防災科学技術研究所・新潟大学
後援：川口町

はじめに

川口町を一変させた大震災＝それは調査に当たった私たちにとっても驚くべきものでした。あの困難な時期に、調査者を温かく受け入れて下さった皆様方に、せめてものお返しとして、調査結果を報告すると共に、皆様方のご意見をを通じて血の通った災害対策のありかたを模索していきたい、そのような思いでこの報告会を開くことにいたしました。どうか、この場を通じて町民の皆様方の率直なご意見を聞かせてくださいようお願い申し上げます。何が災害をもたらしたのか？ 震災の時、地下で何が起きていたのか？ これからの川口は安全か？ 等々の質問に精一杯お答えいたします。

復興が順調に進むことを祈念しつつ。

第一部 報告会(参加費無料・申し込み不要) 1時30分～5時 2階大ホール

1. 岡村町長あいさつ、主催者代表あいさつ
2. 中越地震による災害 -川口町を中心として- ト部厚志(新潟大学)
3. 川口町の地盤の違いによる揺れやすさ分布について 先名重樹(防災科学技術研究所)
4. 川口町田麦山地区の地質と建物被害の関係 宮地良典(産業技術総合研究所)
5. 川口町を襲った地震動の特徴 吉見雅行(産業技術総合研究所)
6. 中越地震による地すべり発生斜面と地すべり地形 井口 隆(防災科学技術研究所)
7. パネル展示とそのQ and A (次のパネルを展示・解説します:調査担当者に質問・ご意見をお寄せください)
地震はどのように起きる? 中越地震によって生じた地震断層 川口町周辺の地質 堀之内～小千谷間の地形分類図
田麦山地区の地質と被害 川口町の各地区の建物被害 軟弱な地盤と硬い地盤による建物被害の違い -ミニ振動台実験-
川口町の地盤の違いによる揺れやすさ分布について 中越地震で生じた斜面変動のタイプと特徴 防災科技研の地すべり地形分布図
8. 閉会あいさつ

第二部 懇親会(参加費1000円;できれば事前にお申し込みください)
5時30分～7時30分 1階 研修室にて
一献酌み交わしつつ、あれこれと。。。。

参加お申し込みは → 町企画高工課 間野光晴 Tel 89-3112 Fax 89-2110
メール kikaku@town.kawaguchi.niigata.jp
までお願いします。
なお 当日受付も承ります。







写真1 報告会(第一部前半)・口頭発表に対して、時に鋭い質問が来しました。

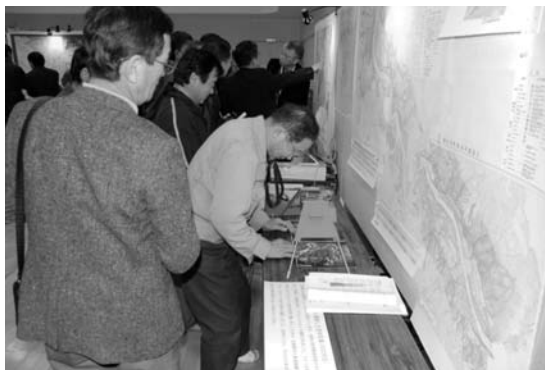


写真2 第1部後半・パネル展示。多くの人の間で活発に議論がかわされました。

3. 報告会当日のようす

報告会当日は、当初の見込みをやや上回る135名の方にご来場いただきました。その大部分の方は、川口町在住の方のようでした(記名をお願いしなかったため、詳細はわかりません)。満席となってしまったので、あわてて席を追加したり、発表の途中でスクリーンの高さを変えたりといった小さな手違いはありましたが、会はほぼ予定通り順調に進みました。口頭報告に対しては、時に鋭い質問が出されることがありました(写真1)が、議論が盛り上がったのはやはり後半のパネル展示でした。ここでは多くの参加者の方々が熱心に議論に参加してくださいました(写真2)。各報告に対して出された意見については、担当者の報告をご覧ください。ここでは、様々な議論がなされていましたが、時に震災調査は行政担当者にとって何の役にも立たない、といった厳しい意見もあったようです。私(小松原)個人が聞いた範囲では、おおむね好意的なご意見を頂きました。たとえば、こんなやり取りです。Q1「地震後に家を建て直したけれど、また次に地震に襲われる心配はないですか?」A1「震度7の揺れでも、新しい耐震基準に即して作られた家は壊れていないので、次に仮に地震が来ても貴宅ならば(実は知っている人)問題ないと思います」「まあ、そうだろうね。子供にはきちんとした家を作っておいてやりたいからね」。Q2「信濃川の河道が昔に比べてだんだん牛ヶ島の集落の方に片寄ってきたように思うけれど、何か問題はないですか?」A2「確かに戦後の空中写真を見ると今よりも河の位置が集落に近くな

っています。それは人工的な河川改修を行ったためだと思います。しかし牛ヶ島の集落は比較的強い地層の上にあるので、急に川に削りとられる心配はないと思います。」「それを聞いて安心しました。」

ところで、パネル展示の良さは、1対1で話ができる＝相手の状況を聞きながら相互のやり取りができること＝にあると思います。たとえば、一般論として「地盤の悪い場所は避けて家を建てたほうが良い」と言う学者がいるかもしれません。しかし、実際に地盤の悪い場所に住み災害に会われた方に向かって同じ言葉を発することができるのでしょうか。また、同じような物言いとして「地盤を良く知ってから家を建てるべきだ」と言う人もいるでしょう。これも、すぐにでも家を再建しなければならない人・その余裕のない人に向かって言うことができるのでしょうか。特に一戸建て住宅では深さ数mより深い地盤の調査は一般に行われていない実情を考慮すると、このような「学術的で理想論的な正しさ」を押し付けるような言動を、私はできません。むしろ「深い地下の地盤を調べるにはお金がかかりすぎる。だから安価な調査手法を開発することは私達の課題と思う」としか申せません。こうしたやり取りの中から、専門家が置かれた立場が見えてくるのではないかと。それは新しい研究テーマの発掘につながるのではないかと、という手ごたえを感じました。

第2部・懇親会は、最も楽しみでもあり同時に心配事の種でもありました。地元から17人、主催者から16人が参加しました(写真3)。懇親会の挨拶を仰せ付けられ冷や汗を流しつつ、「町の復興を祈って乾

資料2 報告会開催に至るまでの準備過程など。

-
- 2005年12月会議：報告会開催の決定。被害調査結果を中心とする一般町民対象の報告会とすること、防災科研と新潟大の担当者に打診することを決定。即日意向打診し、快諾を得る。
- 報告者は吉見（活断層センター：強震動）、先名（防災科研：微動探査）、卜部（新潟大：被害と地震の全体像）、宮地または小松原（地質情報部門：田麦山地区の地盤と被害）。
- 地質調査総合センターに趣旨を説明し、開催方式（主催者・役割と費用の分担）について議論する。
- 同日、稲崎氏から過去に新潟県内で開催された一般住民向け説明会に関連する資料を参考資料として提供いただく。
- 12月13日：電話で川口町に打診。企画商工課に窓口依頼。翌日企画案をメールで提出する。
- 12月19日：川口町にて打ち合わせ。企画商工課星野様・間野様に趣旨を説明し、開催の許可と町の後援を求める。後援をいただけることになった後、開催形式・日時・場所・内容・スケジュールについて議論し、会場予定地を下見する。内容について特に川口町に関する調査結果を中心とした講演会を行ってほしいとの要望を頂く。日時などは3月25日午後、川口町生涯学習センターにて100～150人規模の会とすること、会場費は無料、町内への広告は広報誌や地区総代会などを通じて町が行うこと、会場設営要員は開催者が出すこと、大型備品は町施設備え付けのものを借り出して使うこと、など決定。町関係者の開会挨拶を打診。震災以降に研究者によって行われた講演会の有無・内容・反応・意見を聞く。
- 12月20日：防災科研・井口氏に地すべりの報告を依頼する。新潟大学卜部氏に川口町の被害に関する報告とするよう修正を依頼する。
- 12月21日：修正後の企画案を提出する。この段階で、口頭報告・パネル展示・懇親会の3部構成とすることを決定し、懇親会への参加者募集を町に依頼。報告者に要旨作成を依頼する。
- 口頭報告は卜部（川口町の被害状況）、吉見（震動特性）、先名（微動探査）、宮地（田麦山の地盤と被害）、井口（地すべり）とする。
- 2006年1月6日：広告用ポスター案を作成、広告ピラ案を提示する。
- 1月15日：口頭報告者の講演タイトルと内容紹介、パネル展示の参加者と内容を取りまとめる。
- 1月17日：再修正した企画案を町に提出する。
- 1月31日：再々修正した企画案を持参し、具体的な打ち合わせ、特にスケジュール・当日の時間配分と役割分担の詰める。懇親会参加者募集を依頼する。懇親会の酒食の購入先などを教えてもらう。
- 2月1日：ホームページ作成、参加者とその役割分担を決定する。
- 2月3日：広告用ポスターとピラの仮案を作成する。
- 2月5日：広告ポスターとピラを町に提示し、意見を求める。報告会の発表内容を資料集の形でまとめてほしいという要望を頂く。
- 2月9日：3機関にまたがる報告内容の事前調整と一般向け講演の経験不足を考慮し、予行演習を行うことを提案、参加者各位に意見を求める。
- 2月10日：広告ポスターとピラについて町担当者の意見に基づいて修正後印刷し、町宛に送付する。
- 2月11日：かわぐち町雪灯籠まつりに一部が加わり、会場保守責任者に挨拶する。
- 2月15日：町企画商工課により町広報誌に織り込んで（町内全1,600世帯に広告ピラ配布。町内約50箇所に広告ポスターを張り出し、ポスター展示参加者にポスターの表題などの告知を求める。
- 2月下旬：町企画商工課より総代会にて報告会・懇親会への参加を呼びかけてもらう。
- ポスター作成依頼、展示用小物などを手配する。
- 3月15日：報告会資料集（仮版）を作成する。
- 3月20日：産総研内において予行演習を行う。ここで、口頭報告では地震の全体像に関する話が欠落していること、一般には理解されにくい用語が多々使われていることなど、非専門の非常勤職員各位から指摘を受け、プログラムを練り直し、資料集原稿の修正依頼を出す。
- 3月21日：懇親会オードブルを予約する。
- 3月23日：資料集原稿修正。防災科研に展示物品の借受けに伺う。
- 3月24日：資料集（200部）完成。展示・報告用物品のチェック・積み込みの後、午後出発。夕方川口到着。町企画商工課と町長挨拶に伺う。
- 3月25日：会場設営、実施。
- 3月30日：資料原稿・写真などを町企画商工課宛に送付する。
-



写真3 第2部 懇親会の状況。いろいろな話を聞くことができました。

杯!」といった後は、あまり覚えていません。(もちろん、酔いつぶれたわけではありません)。とにかくいろいろな人とお話ししていたという記憶が残っていますが、一番印象に残ったのは「私は2名の家族(もしかしたら親族の聞き間違いだったかもしれません)を亡くしてしまいましたが、あなたたちの報告の中で『川口の地質は脆い。しかし、それが豊かな自然環境を生み出す源だ』という言葉があったので、なんだかここに住み続けてやっていこうと思う気持ちになった」とおっしゃった方のことです。閉会間際のその一言で、調査したことと報告会を開いて良かったなあと感じました。

4. 終わりに

今回の報告会は、住民の多くが地域の自然を良く知っており、かつ地域的連帯感が比較的強い町で開催したものであり、他の場所、違った状況で調査結果を報告する際の参考になるかどうかは、はなはだ疑問です。しかし、今後同じようなことを企画される場合を考えて、開催に至る準備過程などを資料2にまとめました。このような資料をまとめようと思ったことに、

私たちの今の気持ちを読み取っていただければ幸いです。

なお、こうした災害関係の一般向け報告会は、時期、テーマ、方法、表現など何かでボタンのかけ違いが生じてしまうと、被災地の方々(特に対応いただく役所職員もまた被災地住民であり、災害直後においては多くの場合集会場は避難所となっています)に無駄な負担を強いたり、違和感や不信感を残すことになりかねないこと、特に大切な家族・親族をなくされた方にとっては「震災予防」を基調とする報告自体が苦痛を増幅することになりかねないというデリケートな問題を持っていると思います。この点こそ、私達が最も気にかけていたものでした。ご対応くださいました町企画商工課の皆様やご来場いただいた方々が、どのような感想を抱かれているのか、もう一度一献傾けつつお伺いしたいことと存じます。

こうした報告会が、調査する者と調査対象地域に住む者の間の交流や意見交換に活かされ、自然災害研究をより人の感情の通った災害対策に活用できるものにしていくきっかけとなるならば、これからも続けていく価値が十二分にあるものと思います。しかし、同時に多くの人から寄せられた意見に対し、自分の研究の中でどのように答えていくか、私達を含む災害科学研究者の姿勢と力量が問われていると感じています。

このたびの報告会開催にあたっては、川口町商工企画課の間野光晴主査・星野晃男課長をはじめとする町役場の皆様に多大な御協力を頂きました。末筆とはなりますが、町の順調な復興をお祈りいたします。

KOMATSUBARA Taku (AIST), MIYACHI Yoshinori (AIST), YOSHIMI Masayuki (AIST) and NAKAZAWA Tsutomu (AIST) (2006) : Report from assistants on public meeting "Ground and seismic hazards of Kawaguchi Town, Niigata Prefecture".

<受付:2006年5月1日>